

獸人伝説

実業之日本社

半村良



獣人伝説
じゆうじんでんせつ

一九七七年二月二十五日 初版発行

著者 半村 良

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三(五六二)四三一一

振替 東京一―三二六 ㊦一〇四

支局 大阪市北区真砂町五三

電話 〇六(三六三)一七〇六

印刷所 研文社

製本所 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© R. Hamura 0093-363651-3214

¥980

歌人伝説

半村良

実業之日本社

もくじ

序曲

7

夜の仲間

29

目覚し時計の秘密

52

有尾人たち

75

不遜な挑発

97

全能の戦士

120

青十字の男

142

追われる天使

164

果てしなき終景

186

カバー絵

アルブレヒト・デューラー

装幀 吉川至郎

獸人伝説

序 曲

春かも知れない。

多分春なのだろう。

だが、季節のことは、よく判らない。

花が咲き乱れている。

花の名もよく判らない。

ただ美しい花だ。

どれもこれも美しい色をして

美しい形をして、かぐわしく咲いている。

樹木も生えている。

お互いがつつしみ深く譲り合い

適当な間隔を置いて

他の樹木の邪魔をせぬように

点々と生え繁っている。

どの樹木にも実がなっているが

食べられるのかどうか、よく判らない。

そよ風が吹いている。

爽やかでしかも暖かく

優しい風だ。

しかし、それが東風なのか西風なのか

それも判らない。

なだらかな丘が続いている。

道は全くない。

沼が見える。かなり大きな沼だ。

緑の丘と丘のあいだに

澄んだ水をたたえて、静まり返っている。

その丘や沼のある場所が

いったいどこに当たるのか

よく判らない。

恐らく、誰も知らないだろう。

なだらかな丘をおりて沼に近付くと

沼のまわりに

丸いフワフワしたものが生えている。

いや、生えているのではない。

風に浮いているのだ。

まるで風船のようだ。

透明な風船の中に

白いガスを詰めたらそんな風に見えるだろう。

大きな鶏卵のようだ。

とがったほうを上に向けて

ユラリ、ユラリと風に揺れている。

どれもこれも、その卵形のは

みなどがったほうを上に向け

フワフワと風に浮いている。

なぜか揺れるだけで

場所を移動はしない。

葉もなく、大地とは全くつながっていないのに

その卵形をした大きなものは

フワフワと風に浮いているくせに

動こうとはしていない。

よく見ると、卵形のものの中に

何かある。

人の形をしているように見える。

いや、人だ。

それは膝を胸に抱くようにして

まるで胎児のように

その風船のようなものの中に

とじ込められているのだ。

空は……。

空はない。

空がない世界など考えられるだろうか。

だが、そこに空はなかった。

ただ、空のかわりに

〈時〉があった。

その世界の上には

空のかわりに〈時〉が掩いかぶさっている。

もう一度小高い丘の高みにあがって見よう。

沼を中心になだらかな丘が

それをとり囲んでいるのだが

隣接している土地は

ない。

そこに空がないのと同じように隣接した土地もないのだ。

勿論、海もない、河もない。

町も田畑もあるわけがない。

花の咲き乱れる緑の丘と

人の形をしたものと同じ込めた

卵形のものが

静かな沼のほとりであって

ほかには何もない。

ために、沼と反対側の斜面を

隣接した土地のないほうへおりて見る。

沼へおりる時と同じように

なだらかな丘の斜面を進んで行くと

しだいに濃い霧が生じ

寒くなって行く。

柔らかだった足もとが

いつの間にか草から岩に変わる。

霧に濡れた荒々しい岩がづらなり

あちこちの窪みに泥水がたまっている

その岩地を更に下って行けば

もうあの暖かく優しい風が吹いた

緑の丘は見えなくなり

ただ濃い霧が妖しくうごめく

冷たい岩場になる。

あちこちに泥水の溜った岩場には

よく見ると

蛇や

蜥蜴や

蛙や

ありとあらゆる両棲類、爬虫類

そして

ありとあらゆる醜い小動物たちが

のそのそとうごめいている。

やがて青白い電光があたりを照らすようになり

しだいに雷鳴が聞こえはじめる。

醜い小動物たちがうごめく

岩だらけの土地のあちこちに

筍たけのこのような先のとがった岩が現われる。

更に進めばそれはしだいに丈高くなり
雷鳴が耳をつんざき

間断なく青白い電光が明滅するあたりに到れば
その中の何本かは

途方もない高さでそびえ立ち
その頂きは濃い霧にとざされて
見ることができなくなる。

やがて霧は激しい雨にかわる。
冷たい雨だ。

あたりに硫黄の臭気が立ちこめ
激しい雨の中を

硫黄の蒸気が生きものののように
不気味に地を這う。

地に這った硫黄の蒸気は
醜い小動物たちをその底に沈め
つつみ隠してしまう。

その雨と硫黄の蒸気の中で
ふと前方を見ると

幾千とも知れぬ黒い影が

こちらに向かつて挑みかかっているのが見える。
しかし、その幾千とも知れぬ黒い影は
一定の線からこちら側へはやって来ない。

何か目に見えぬものが境界の壁を作り
彼らはそれに向かつて突進し

はね返され
後退してまた突進をやり直すのだ。

何遍打ちかかろうと

彼らはその壁を越えられぬらしく
越えられぬことが判っていても

そのものどもは
繰り返し繰り返し

目に見えぬ境界の壁に向かつて
際限もなく挑みかかるのである。

彼らの一人一人がその壁に体を打ちつけるたび
雷鳴がとどろき

電光が走る。

そして彼らははね返る。

彼らが越えようとして越えられぬ壁の向こう側

すなわち彼らの側の大地は

泥濘である。

ごつごつした岩の上で

彼らは何億年もそうした前進と後退を

繰り返しているに違いない。

その果てしない運動で岩は砕け

今は泥濘と化しているのだ。

壁に挑むものたちの更にその先は

毒々しい赤い花の咲く世界だ。

葉という葉が黒ずみ

樹木という樹木は

寄生植物の宿主となっている。

蠍と毒蜘蛛が群れ

寄生植物に覆われた樹木の幹を

毒蛇が這う。

風はなく太陽もない。

薄暮の明るさしかない世界だ。

時々狂ったような笑い声が聞こえる。

鳥の啼声などではない。

たしかに狂った人間の笑い声だ。

笑い声がするたびに

どこかしらで樹皮が裂け

赤い血がしたたる。

狂笑のたびに血のしたたる森を過ぎれば

次は丈余の黒い草に掩われた草原だ。

黒い草原を何かが走りまわっている。

たしかに生き物がいて

草の中を走りまわっている。

だが

黒い草が動くだけで

そのものたちの姿を見ることができない。

ここもやはり風はなく

そのものたちが動くときにだけ

黒い草むらがざわめくのだ。

黒い草むらの中はひどく愉しそうだ。

そのものたちは

ときどき何人もで笑いこけ

それにまじる甘い呻きは

男女の交媾のときのもののようにだ。
あちこちでその声がする。

するとそのものたちが笑う。

黒い草原の彼方に

何か大勢のものがつらなっているのが見える。

草原の彼方は砂漠だ。

茶でもなく灰色でもない砂の世界。

そこに砂と同じような色の制服を着た人形が

数え切れないほど並んでいる。

兵士の人形だ。

どれもこれも同じ顔をして

同じ服を着て

同じ武器を持って

砂漠の彼方へ向かい

一列縦隊でえんえんと並んでいる。

彼らが人形にすぎないことはすぐに判る。

動かないのだ。

しかしその無限の数の人形の列は

無限である為に

生きているのと同じ意味を与えられている。

砂漠の砂丘という砂丘のかけに

半分かくれるようにして

張りばての太陽が置いてある。

赤く塗り

砂丘のかけに沈もうとしているのを

あらわしているつもりだろうが

どれもこれも同じように幼稚な作り方で

どんな子供でも

それがにせ物の夕陽であることは

ひと目で見抜けるだろう。

幾千幾万の砂丘に

幾千幾万のにせ物の夕陽。

そしてここにも空はない。

ただこの世界に掩いかぶさっているものは

〈時〉だけだ。

兵隊の人形が地平の彼方へ向かって

無限に続いているのと同じように

地平の彼方からこちらへ向かって

無限に続いている白い列がある。
白骨の行列だ。

人形の兵隊が動かないのと逆に
その白骨たちは

砂漠をカサコソと這って来る。

砂漠と黒い草原の境い目あたりに

巨大な白骨の山がピラミッド形を作り

カサコソと這い寄って来た白骨は

その白骨の山におのれを加えてとまる。

ピラミッド形の白骨の山は

すでに見あげるように高い。

しかし

間断なくやって来る白骨たちが

いくらその山に骨を加えても

その山の高さはいっこうに変わらない。

空のかわりにその世界を掩った（時）から

ときどき何かが

鋭い音をたてて落下している。

どこへ落ちるのか

まったく予測できないが

その降り落ちるものは大地に突きささって

地の底に吞まれて行くようだ。

黒い草原の中にその白く光るものが落ちると

ときどき

耳を塞ぎたくなるような絶叫が聞こえる。

そして

何者かが絶叫するたび

そのまわりには

底抜けに屈託のない愉しげな笑い声が立つ。

降り落ちて来るものは

ギロチンの刃だ。

……草むらで声がする。

底抜けに陽気な笑い声の合い間に

尊大な上に

わざとらしく真面目腐った様子で

何か語り合っているようだ。

「今度はどこだろう」

「彼らのすることを予測できているのか、ばかばかしい」

「そうだ。気にしてもはじまらない。いずれは来るのだ。」

その番がいつ自分のところへまわって来るかというだけの問題ではないか」

「ほう、そうかね。気にならんと言うのかね。大したものだ。大した度胸だよ」

「何もそう突っかかって来ることはないだろう」

「突っかかりしてはいない。ただ感心しているだけさ。何しろ、あいつが来たら儂らは滅びなければならん」

「大げさなことを言うな。彼らが不滅であるように、儂らもまた不滅なのだ」

「ちょっと待った。彼らは本当に不滅なのかね。本当に」

「そうそう。彼らの不滅性についてはこの儂も以前から疑問があった。不滅だと言うのは、彼らがそう主張しているだけなのじゃないかね」

「議論の好きな連中だな、君らは。彼らが不滅であろうがなかろうが、彼らが儂らを滅ぼす存在であることはたしかではないか」

「君は必要以上に彼らを恐れている」

「すると、儂らは自分が滅びることを恐れてはいけないうつのかね。滅びることを避けてはいけないうつのかね」

「そうは言っていない。命は守るべきだ。しかし、仮りに滅びたとして、それは儂とか君とかだけのことで、儂ら全体が滅びたということではない。儂らの種族は、彼らに対して絶対的に不滅なのだ」

「だが彼らは儂らを片はしから滅ぼす。この事実是否定できまい。彼らが襲いかかって来る時、儂らは何の防衛手段も持たないのだぞ」

「たしかに今はその通りだ。しかし、これは永遠の戦いだ。儂らはその長い戦いの中で、きっと彼らを打ち破ることができよう」

「それはいつだ。勝利はいつ来る」

「時にまかせよう。時はその答を知っている」

「ではそうしよう。それで、どうやって勝つ」

「それなら答えるのは簡単だ。我々は彼らにかなわない。戦えば必ず彼らが勝つ。だから我々は負け続けるのだ。そうすれば必ず勝つ」

「負ければ勝つ、か。哲学的な答だ。何かがありそうな答だ。だが本当に何かがあるのか」

「よい。常に勝つ者は、永遠の勝者ではない。儂が言うのはそのことだ。儂らの努力で勝利の価値を交えることができる筈だ」

「勝利の価値を交える……」

「そうだ。方法はある。我々は至るところに散らばっていて、場所によってその為の準備もまちまちだ。準備の整っているところもあれば、まだ整っていないところもある。だが、この瞬間にも、彼らが我々が準備を整えているところへ乗り込んで来てくれさえすれば、儂らは見事にそれをやつてのけよう。彼らを勝たせるのだ。彼らを勝たせることは簡単だ。なぜなら儂らは彼らにかなわないからだ。必ず負けるからだ。しかし負けかたがある。負けるには負けかたがあるというものだ」

「何やら頼もしそうだが、それ以上のことは訊いても教えない。本当のことは何ひとつ明かさないのが儂らの習性だからな。まあ、それはそれでよろう。しかし、それなら儂も念を押しておきたい。皆も知っていることだが、ここであらためて彼らについて、確認しておこうではないか」

「何の為に……」

「当然のことだろう。負けるが勝ちの戦法の提案者は君らだ。儂ではない。それが失敗したときの、責任の所在を明らかにする為に、儂は共通の確認事項を作っておきたいのさ」

「よからう、言つて見てくれ」

「儂らは彼らのつかわした使者を、決して殺すことはできない。儂らの仲間は、その使者を倒せないのだ。傷つけることもできない。彼らの使者は、儂らに対して圧倒的な力を持っている。儂らが仮りに使者の心臓をえぐり取ったとしても、使者は死なない。これだけはたしかだ」

「それだけか」